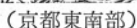


- 伏見城は文禄三年（一五九二）に築かれた豊臣秀吉による最後の城郭で、京都市南郊の伏見桃山丘陵一帯にその城下町と共に展開して



いた。地震や戦乱により倒壊や焼亡を繰り返し、その度に再建されたが、元和九年（一六二三）徳川家光將軍宣下後ついに廃城となり、秀吉築城以来三一年間の命脈を閉じる。調査地はこの城下町の一角にあたり、古絵図には仙石左門屋敷地に

比定されている地区である。調査では平安時代前期、桃山時代～江戸時代前期、江戸時代中期～後期の遺構・遺物が検出された。桃山時代～江戸前期の遺構では井戸・柱穴・土壇などが検出されているが、木簡類はそのうち東西4m、南北5m、深さ2mの土壇から、土器及び大量の漆器碗や木製品などと共に出土した。

- 8 木簡の積文・内容

- (1) 真竹おれ竹一そく□

一そく仕候



124×23×2 032

(2) 之へ下地たて竹



130 × (15) × 5 032



(3) 「上うす竹三本」

127×17×3 032

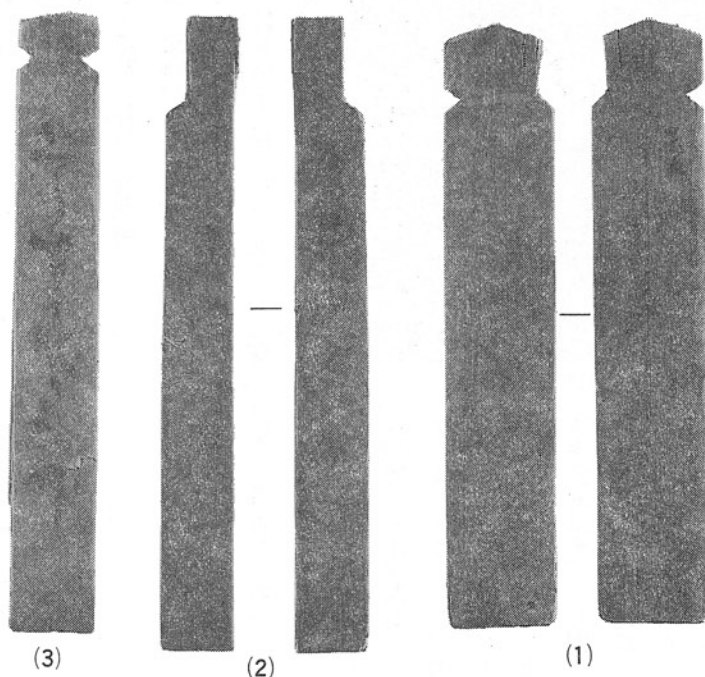
(4) ×衛門尉様

(75) $\times 176 \times 3$ 065

(5) 「上谷」二口×

(193) $\times (69) \times 3$ 065

(1)・(2)・(3)は荷札あるいは付札で、「竹」に係する字句が目立つ。竹類を扱う江戸時代前期の職人か商人が居住する町家の存在の一端がうかがえる。(平田 泰)



『平城宮木簡 四』の刊行

平城宮跡出土木簡の正報告書としての第四集が刊行された。対象となるのは昭和四一年に宮の東南隅で実施された第三二次補足調査で出土した木簡である。同調査では宮の南を限る大垣の北を流れる東西溝から一万二千点をこえる大量の木簡が出土した。削屑がその大半を占めるとはいえ、式部省で行われる考課・選叙の関係木簡がまとまって出土している。すでに『平城宮発掘調査出土木簡概報(四)』の中に釈文の一部が略報告されているが、その正報告書にあたる。同調査の一万二千点余の木簡を一冊でまとめることは困難なため、三分冊に分けて刊行することとなり、『平城宮木簡 四』はその第一分冊である。約二千五百点の木簡の写真図版と別冊の「解説」よりなり、「解説」には遺構の概要・考選木簡の分析・釈文等が掲載されている。

奈良国立文化財研究所発行

(コロタイプ 図版一二〇枚 解説A五版・本文四一四
頁 一九八六年三月刊 頒価二五、〇〇〇円、**〒一、五
〇〇円** 解説のみ三、六〇〇円、**〒四〇〇円**)

奈良市橋本町三六番地 皓明新印刷